五更話

安方忠義傳

前編下帙二冊

巻之一

ハ 13
3237
5

へ13
3237
5

昭和十年七月九日

善知安方忠義傳前編巻之三下冊

江戸　山東傳著

緑亀館文庫

無古曽關

第十一條

さても大内の光國ハ。唐衣を伴ひて。常陸の國へ立出く。藤六夫婦のそゝのくなりし。終末をくゝ〜かゝりけるゆゑ。涙ぐましき老の身の。かゝれる色に物語をゆゝく。悲嘆の涙せきあへぬ。詞もおろ〜ちにけり。中おりていひけるハ。誠ふ藤六が諫死ハ。はゝ〜なりの。鏡なり。おゝむべしかゝ〜むべし。彼がごとく忠士を家来に持なば。頼信君の汚放埒。さくもうこて紀御事や。妹綱手ハ夫ふつれ児をさゝこだて。狂氣せしも理なり。不便の者ハ身のそくや。おゝ〜ふ長生〜かゝる愁ハ。ゆゝんより。寧死やるがはしあるゝ無用の老の

分や。よゝなの長生やといひつ。涙ふむせうりけるぞ。光國いそぎ背後ゝ
まわり。背を撫ゝ分抱き。唐衣志とやうふ手をつゝ。今ことしやとばかゝ。
憂事のかさなりゝ。世ふ立がゝた我身あれば。浮ぬ不便うひられ下さるべし
といふも泣声なり。光雅いとゞ衣と手。目をとりあゝくいひられば。さ
ゝゝこんぞれうちふよゝもおひゝちけるぞ。生るつきもうつくしく。ムゞくも臣
こびうり。氣ばらひさるゝ。我おりふ旨を両人ふかゝれぐーようゝよ。
日来光國ふ妻のことを愁居ゝふ。此度ゝうゝを唐衣が危息を救来
りし変。病世の深きえゝ。ゝゝ。ゝ月老の紅糸をむすびおきまし
せ忘れゝん年ごろも似合ゝゝ。ゝゝ一對の夫婦ゝり。互ふられば得ぬん
あゝば忌明の後。婚姻をとりのゝぶ。汝等いいゝおりふ夫ゝ人といひるるぞ。
唐衣ハ顔をあらめ。光國が心底をとゝりかゝ。塵を捻りゝ。ちゞゝく返答

をせざりしゝ。光國いひけれハ。親人のおん兒ーあゝうゝハ。唐衣ゝあさ一得
心あゝば。いゝでゝ背きゝぐゝんといふゞ。唐衣もふつゝうなれ我身をいとひ
玉ひゝどハ。願ゝゝもゝ仕合といふゝけり。光雅ことゝ紙ゝ大ふゝ汚ゝ。
ゝゝ愁ひの色をあらし。權且両人ハ旅のつれをもむを。我ハかゝこゝて
亡人ゝの回向せんゝゝ。佛間ふゞ入られかゝゝゝゝゝ忌明ふいゝう
けるバ。吉日をえらびゝ婚姻をとりのゝ。夫婦ゝゝもまゝゝ。ゝ人心成
りちひゝ光雅の老体をいゝゝり。孝行を尽ゝけるバ。光雅ハ老後の
たのしゝ此うゝゝと。安堵のゝひをは。喜ぶことゝ限りなし。さて禍福吉
凶をあざなゝる縄のごとしといふ常言ゝゝの哉。喜びさかりれバまこと
然ひを生ず。其冬の半ふいゝり。光雅偶風のこゝちふゝ打臥るゝ。次第
ふおりゝ病となり。さゝみゝる命数ふや。良医百薬の志しなし。今ハ

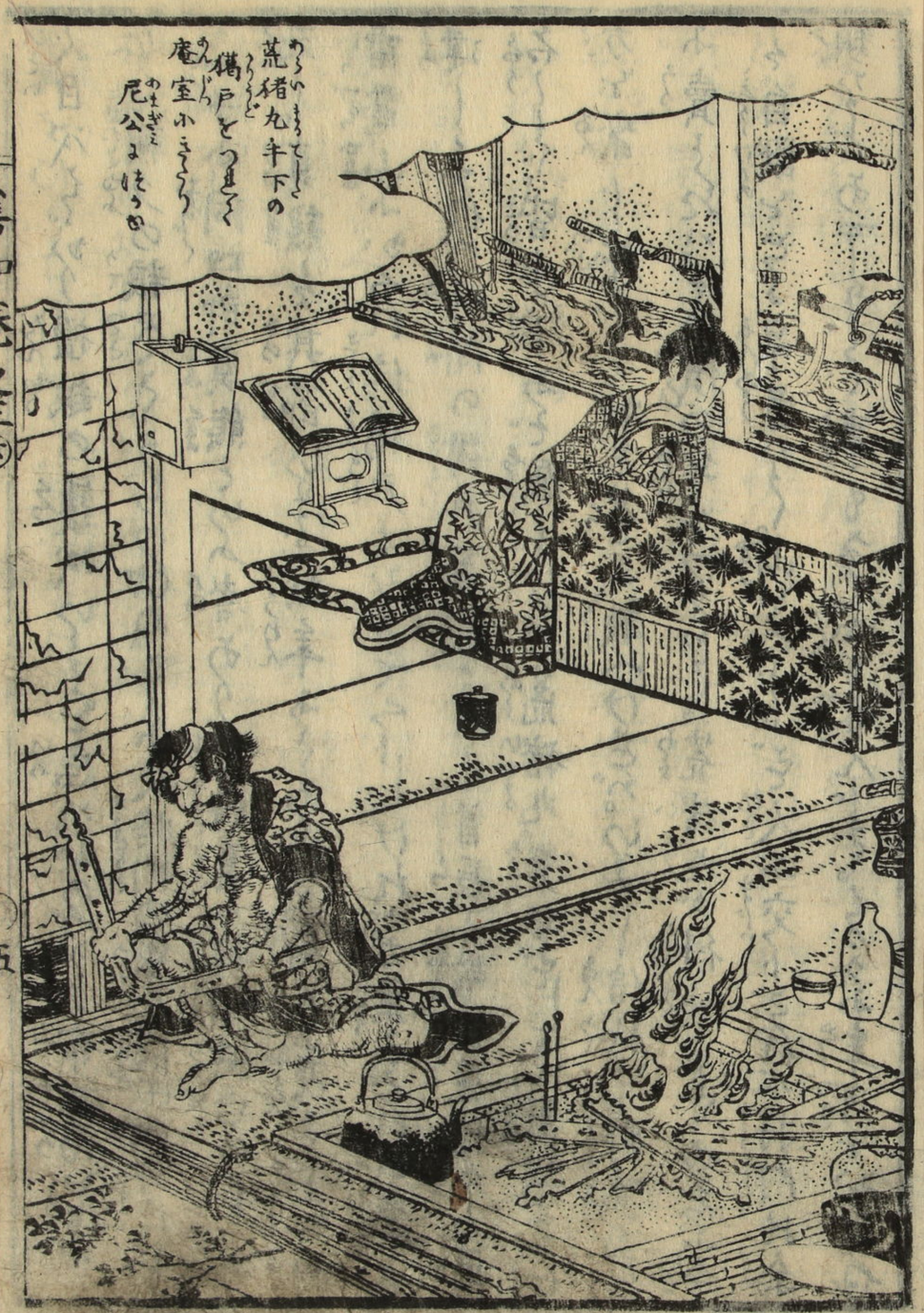
はてとこそ〳〵しぶ。光雅枕近く光國をよびけるへ。我前年絶交の
伐の刻。豊前菱形山の合戦ふ。軍令を背と。主君満仲公の御勘氣な
かうふ臣を文孤後悔し。何とぞ生涯のうち一功をたて。御勘氣の御
せんりのと心がけしぶ。中老衰〳〵功をたつるも力もなく。いたづらふ年
月をおくり。その志をとげずして死をれこと。これのみ冥途のさわりあり。
此後汝我ふかうり。源家ふ對し何ふ成れ一功をたて。我御勘氣を
免をこひうるよ。これ千僧供養の功德よりも。我ふおかくの遠ふ
勝るり。此度られぐたのむなりといひ。ふ錦の袋ふ入る太刀を取
いとしくいふり。折ふくしくいふぐ此宝剣のいれをいとしく語ふ給ぐ。
今かうりぬをぞしこれ遠前年の度ふれが。満仲公おぼし〳〵へ。
天下を守る者よりた太刀を持ぐいぐ。せんて。鉄孤あつめ鍛治を召

太刀をたくふせくえるへぐ。御心ふつ〳〵太刀なりきれふ。ある者やを
様。筑前の國三笠の郡土山といふ所ふ。異朝よりくふかぐの細工
渡り〳〵。數年住ふ。彼孤召とてへいぐあくんとゆ〳〵をるへ
彼者孤都ふ召上せ。太刀をたくふせくえるへぐ。とかく御心ふ叶ひ
ひかく〳〵下〳〵ふぐたまくぞありけれ。然るにかの鍛治。細工の名を失へ
こくを心憂おりひ。仏神のかなふぐいふるはじと。八幡宮孤祈て。分明
の夢想を得て。好くびよく金を鍊し。釼撰〳〵六十日ふ。最上の
釼ニふり作出せり。長さ二尺七寸。彼漢の高祖の一尺の釼ふて
いへつぐ〳〵。滿仲公よろこびをひ。二ツの釼あり。有罪の者とゆ
えのふ。一ふりへ髭孤くくくきりけまべ。髭切ニ名づく。一ふりへ鬚
をくくくきりわれべ。膝丸とぞよびをへ。さて其時かの鍛治。釼孤

う流こん鳥。陰の太刀と名づく。別ふ一ふり打これへとるうつこの劍なり。されば髭切膝丸ふもおとうとどとく。陰の太刀ふれがゆゑ。玉兎劍。一名陰の太刀と称じく。彼二ふりとるも秘藏しおひしの。我軍功ふ賞じ玉ひ。ほ自筆の感狀ふとくこれをくこうりね。さるゆゑふほ勘氣の節も。此太刀ふ於くハ何の御沙汰もなく。今ふ於く持伝ふ。誠是我家の面目とそだに宝ふれば。今あらためて女ふ申づりふまつり大切ふあつひく子孫ふ伝ふるべしといく苦しげふ息ふ付きさけく語りく。太刀とふ五ひつ目ばの光國押戴。ほ遺言の旨逐一ふうけたまりね。心ふ銘じ骨ふ鏤く忘ぬ。某ふ不肖也といへども。粉骨細身して微功をたく。ほ勘氣のゆゑしとうけ。靈魂ふ安んぜべし。ひのくごほを残しおふるといひきとぞ。

光雅いとうれしげふ打笑ひけれがさるうち此世の名残ふく生死長夜のあだ夢。醒くそうなくまりふけり。光國夫婦ハ嘆き記し尽くとぞうもあんど。いけく唐衣ハ両親ふいとれ。愛く落くく。ぶうく涙のをさほりふ討ア。安堵の思ひせーゆ。ものく。又舅ふいとれしまなれば。いとなれ悪き病せふく。くまで愁をうさわることぞ。世の中ふ我身ぞうり。果報ふくなふ者ハあじと。かくぐるたつく。雨山と悲こさるれハ。げふ理アとぞ思ふれるとて。あくぐたふあくぐれば。夫婦泣く葬の支度とふ。野外ふ送りく一片の煙とな。七日くの仏支ふわんごふふ営こ。ふ日縗衣の袖をちぢりけくあしらびしね夫いとてもふ爰ふ又如月尼ハ良門味方と集ん鳥旅立く後の世ひとり彼筑波の麓なれ菴室ふ住。其吉左右を待くびしまれが。

如月尼
髪剃

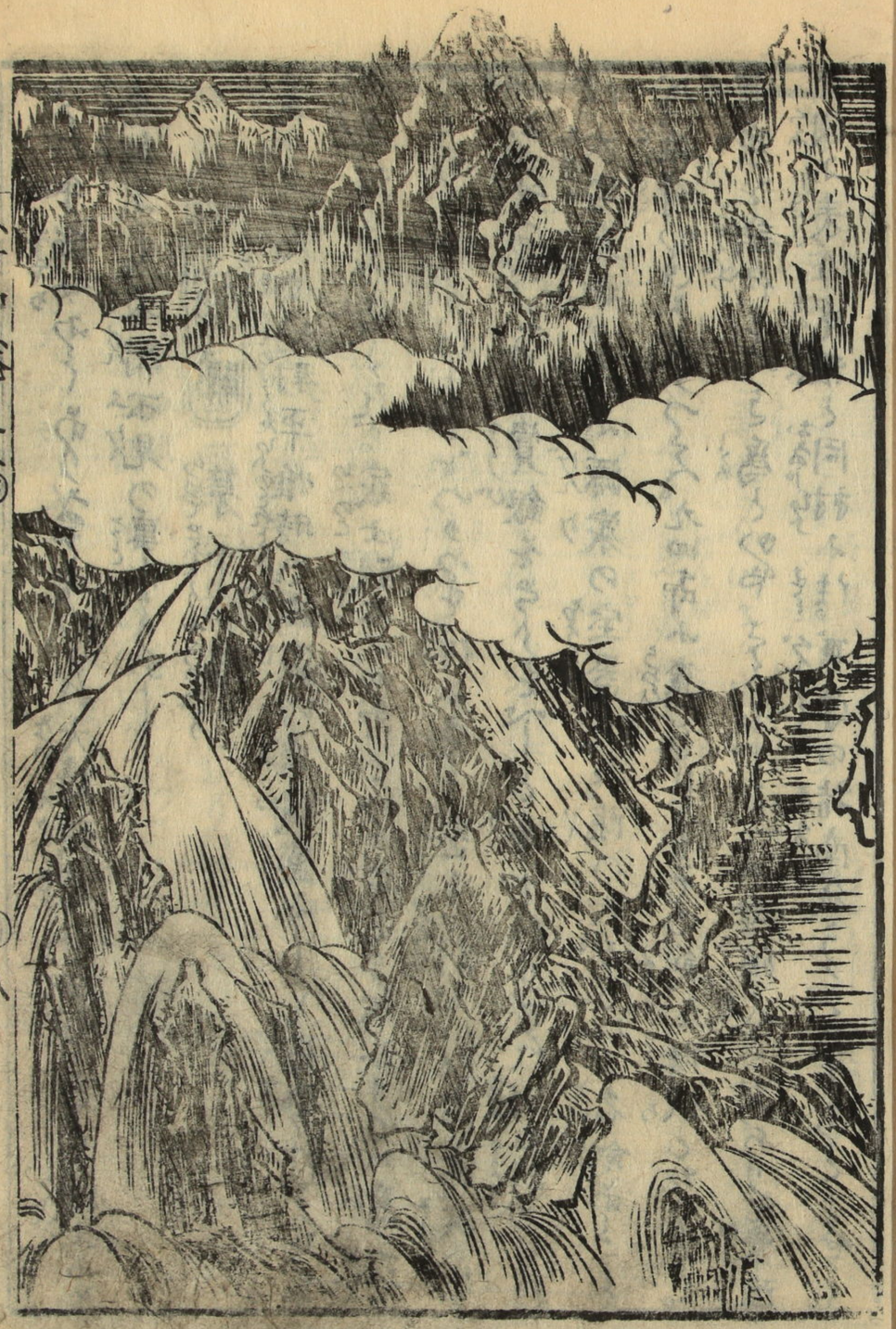

荒猪丸手下の
猪戸をつれて
庵室ふさぐ
尼公よばう

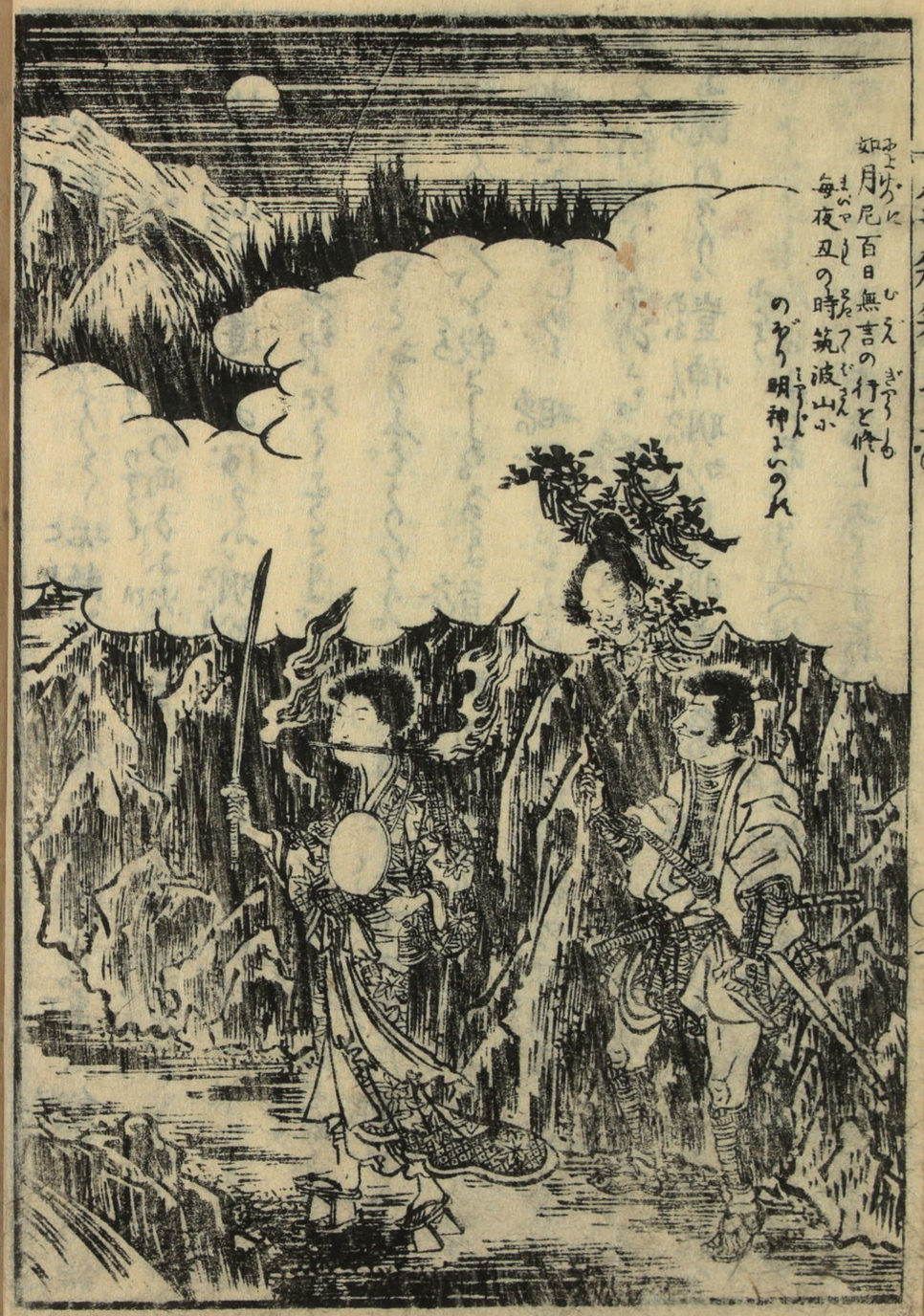
人目ばかり擅越の履物いとを忌べ。おのづゝ布施物を得なく。朝夕の粮尽さくらつびぬ。こゝふ又将門の家臣。隅田九郎将真が一子ふ。同四郎真熊といふ者あり。父将真ハ将門滅亡の刻打死し。真熊も其節いまだ幼年なりしが。爲人ふ及ゝ。上野國雷電山ふかくれ住。猟戸となりてくらしけれぶ力量とゞれ武藝ふ達しあれば。仲間の猟戸等おそれ首長と敬ひ。荒猪丸と異名しゝ。皆手下ふぞ属しけれ。荒猪丸。労せずしゝ獣ばかり仕方を案し出しゝ。かゝ等ふ教へけるゝ。いよ〳〵信伏し。野味を市ふ賣ゝたハ。その價の半をいつちゝ。荒猪丸が得分とゝ。ゆゑふ今ハ自獣をとる辛労なし。山をくだゝと人ふ交ゝられば。将門れ余類なゝどあるゝ事もあ。心を安んじゝ。ちゝふ年月をおくれ。

去ゝれふ頃日如月比五尼。良門と心を合せ。王位をうゞん隠謀ありとなゝ。時いゝりとゝ。手下の猟戸のうちゝ野衾魔九郎。旋風喜六。栗鼠早太。山鶏吠助。といふ四人の者を。かの庵室ゝつけおゝて。朝夕の煮焼をさせぬ。なゝふも栗鼠早太ハ早走の達人あり。荒猪丸おのれも折〳〵庵室ふ行通ひゝ。日〳〵の費をゝじめ。ゝふ所の事をはゝのひゝり。ちゝる程ゝ如月尼ハ。荒猪丸ばかり得ゝ心ゝ安んじ。此ゝを飯俗髪をのゝべゝ。一間かこひゝれ所ふ引籠て。髪の生ゝを待。時ゝ荒猪丸を相手ふして。剣術ばかり調練し。或ハ兵書を讀ゝ軍法を学我神功后皇のゝめしふゝ。自斧鉞をとりゝ天下ばかりゝ。不敵ふもおりひゝり。かゝ仏戒を破ゝれ庵室ゝれば。仏壇ふハ鼠糞をひりちゝし。経巻をけがし。蜘糸をひきむすび〳〵仏体を

はるゝ。経紙ゆゞりて壁ゆあゞなゝべ。讀経の声ハ。霜夜の寵馬と
ともみたゝえ。香炉ととりて火桶とうせバ。馥郁ゝゝれ香氣も。夏の夕
の蚊やり火とたらうりね。或ハ卒都婆を薪とゝゝ。酒ゆあゝてゆ或
ゝ経机と魚盤とゝ。獣の肉をゆゝれバ。不断念佛の道場。忽屠
家の肉店と変じ。うゝてゆりけれ形勢うり。ちゝのこなゝゞん。深山ゆ生
立ゝ。熊のごゝゝゆ鬚ゆひ毛げゝと。狼のやうなれ眼ざゝの荒男ども。
そゞ近ゝにうゝれバ。恰も俊蔭ゞ娘のうつゆ住ゝごゝゝり。如月尼
今ハ墨染の衣とゆゞゝ。いろゝゝ衣と着ゆまゝゝひ。顔ゞせのうつゝしさぞ
嬋娟ゝれ牡丹花の。咲かゝたるごゝゝゆゝ。ゆゝりゆ嚬ゞうなゝゝゆ。頭
ハ栗の毛毬のごゝゝ生のびゝ。美女ゆ似合ね頭の様。いゝりのさゞゝ姿せ
かゝゝ尼公大望成就。祈誇の爲。百日無言の難行とゆりひ立。毎夜丑れ

時ゆ。水無野川ゝひゝりゝゝ垢離をとり。胸ゆ鏡をかけ。手ゆ剣をりもつ。銅
鈴ゆ鳴りなゝし。明松の両方ゆ火をとりてロゝくりゝ。高足駄をうゝこりゝ
ゝ。筑波山の險道をのぼるゆ。明松の火風ゆちりて剣鏡ゆかゞやゝ。銅鈴
の音ハゝゝゝゆゆゝたゝくゝゝさゝゞしゝく。かの宇治の橋姫ゞ。貴船ゆまゝゞ
祈勢も。かゝやゝおりゆゞうりなり。又荒猪丸ゞ手下の猪戸等ゆ命じて。
毎夜一人ゝ人を殺さゝ。ゝゝ首と神の枝ゆゆひけけ。紙手をとりかけて。
荒猪丸ゆとしめゝ相具ゝ。その首を筑波明神の社頭ゆそなゝゝ。心
願を祈祷ゝ。そのゝち首の髻ゆおりゆつけゝ。尽ゝ水無の川つゆう
みゆ沈めゝり。豈神明ゝゝゝ非道の祭を納受ゝたまゝんや。ちゝれを
ゝさゝゝゝる。尼公ゆゆあゝさゝゞけまゞ。是皆内芝仙ゞ蝦蟇の妖術
胸間ゆゝけゝりゝ四ゝとちゝゝまね。花の顔柳の腰。羅綺ゆゞもたへ



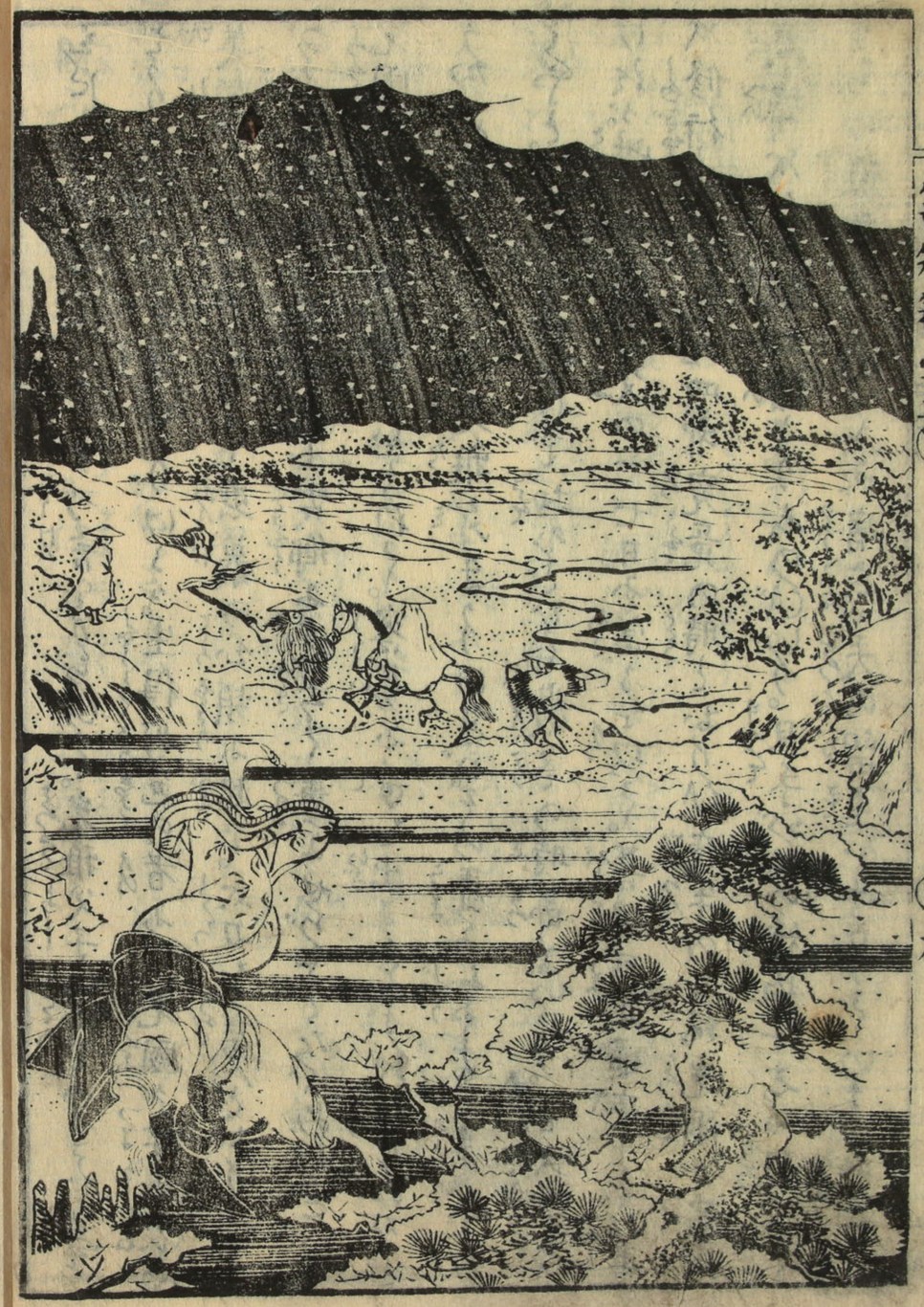

如月尼百日無言の行を修し
毎夜丑の時筑波山ふ
のぼり明神よいうん

ざれ手弱女ゝ〜ありうべからず。かゝれば大膽強悪の志あることゝ。漢土ハ本朝ハも未聞不見の事なりかしゝ。

下の紐の關 第十二條

爰ハ又。左衛門尉平惟時ハ。源家の武威盛ハ〜く。權勢ハけ〜しを日来ハ〜こみ居〜しに。家士羽太九四郎といふ者あ〜て。おりてハ意ハ皆こゝありとゝ〜。いとまをつうとて休ハるゝ。密く一討をいひふくめ。其ゆゑ仕おせうべ。おく〜賞銀をとらゝとべしと命じけり。これ何の討でなれば。大宅光雅が家ハ。源家の宝器〜〜れ。陰の太刀といふ名剣あることゝ。惟時ハひそ〜ゆつ〜く。九四郎ハ奪ハらじめ。その剣を形代となゝく。源家を調伏さべき爲とかや。さるハどハ九四郎浪人といひて常陸の國ハ来り光雅と同村ハ住。軍学の指南ぜうゝれおはしとよせゝく。

立ちいり。ひさ〜〜ハ巧言をりらひく。光雅父子ハ心をゆるせどもそうりね。彼いまゞ妻ハりけるハ。生得好色の者ハて。光國ゞ妻唐衣ハ美麗なれ姿をゝく。悪墓の仏頻ハ起て。太刀を奪ハんとおりハのみ。唐衣をも盗出ハ。古郷ハ連去ゝ妻ハ せゞやとたくみけるとも光國ハ力量武藝をおそれく。容易ハくハ折もがなとうかゞひけれらハ。光雅ハ事ハ〜〜ハけるバ。その虚ハ〜〜ハ事ハ〜〜やと。ひそうハ去びけて。ハかゞなく歳冬の時節ハいとり。一日大雪ハけれハ。此日光國。亡父の七七日ハ當ハ〜ハ。菩提所ハ通夜〜〜仏事成修行しけれを。九四郎究竟の時とおりひ。夜半のこゝろ光國ハ家ハ高塀ハ乗越。二階より忍びいり。且手ハ〜ひの矮狗を志め殺〜〜うちの様子をうかゞハ。唐衣ハ夫の留主をまりうくいまゞ睡らを。



くおと羽太九四郎
雪夜大宅の
光國が家小
太のびいり妻
や衣るびゑ
宝剣をうばひ
く逃去

下女ハ庖厨ふ。居ねうしく居くれを幸ふ。先唐衣をぬいくるぶす
葛籠のうちゑ押入く背もひかくく案内を知くれ事なれば何の苦
もなくかの宝剣を盗ろう。事二つゑ終くる時。下女初うち成醒し。盗人よくとよぶりつ。追出けるバカをて
らうと抜く唯一刀ふ斬倒し。花ごくふ逃ごし。追人のかくんをと
おそれ山越しくおらゆうと筑波山の間道ゑそさしかくねゑ。さく雪
そそくはようくうみぐれ。紛く揚くどくく。柳絮を散そう如く。
鵝毛を花さふ似くう。かくれ大雪ふ蓑笠くても着されい真袖よ打
はらひはく雪あうと便ふさくみ行しが山おろしの吹雪そけしくしく。
面ふはげくく打くがごく。寒氣骨ふ冷さうり。あこぐ足がぶりて
いふともさぐたかとるたふ。日未よく知くる道も。雪たくはりて一面

の土地とうり。東西をだふつさ人くれば。公ハゆくけふくゆくといくる所
前ゑくうぐ。やうやく筑波明神の社ゑくたどりはき。階の上よりふ
くく。擅息を休めくり。柳此御神ハ當山の峯ふあり。稲村權現男
躰女躰両宮を祭る所なり。桓武天皇の朝ふ徳一上人當山を完基
し。其後方巻上人。權現を勸請しく鎮主くと。これが當國の大社ふ
ちく。荘厳美麗を尽し。朱の玉垣。緑の甍。金柱。朱欄干。格子。
花狹間。細工を畫し。丹青ゑいろどり。あくもくすばりふく桁梁
の彫物ハ。桐ふ鳳凰。雲麒麟。牡丹ふ獅子王。波ふ犀。皆金玉をちり
ばめね。いく手ふりし古木の杉。社のめぐりふ立すぶび。森くとくの
さどく。常ふ天狗のさくく。魔所とあくれく宮居なり。にくくを
九四郎ハ此時。葛籠を幻くれく唐衣を引出し。抱くていひけれを。

さぞ息ぼそうして苦しかりけるん。某おん身をかゝ苦しうもまつて悪意
ふかうぐ某おん身ふらぐゝはゝ時より。美麗なる姿ふまぐゝ
おりひそめく。元時も忘るこてあこつぐ。さぬぐゝふ思案をめぐらしこる
が。我性急の生なれば。長く事をなめくふふもろびぐ。我浪人となりしい
實ハ討なれば。手短ふ奪とり。善惡二ツハおん身の心もぐいゝく。速ふる
を決ことくふもかぐと。心をさぐめくく。已ふ今夜此もぐよおぐり。憲慕の
情の切なるくとおりひかりく。心ふもぐひるぐどれより本國ふ連行て妻
とし。一生を安樂ふ養ぐ。若又承引なふ於ハとても足手まぐひ
なれば。此所ふ於く殺害し。悪獣の餌食とゐさん。ふもぐふぐぐや。
もぐぐふぐぐや。返答せよ。善悪二ツが生死のさういぞかしと。刀の鍔元と
くろぐぐせきふせくくいひけるべ。唐衣演をもくくとおとくしたる。

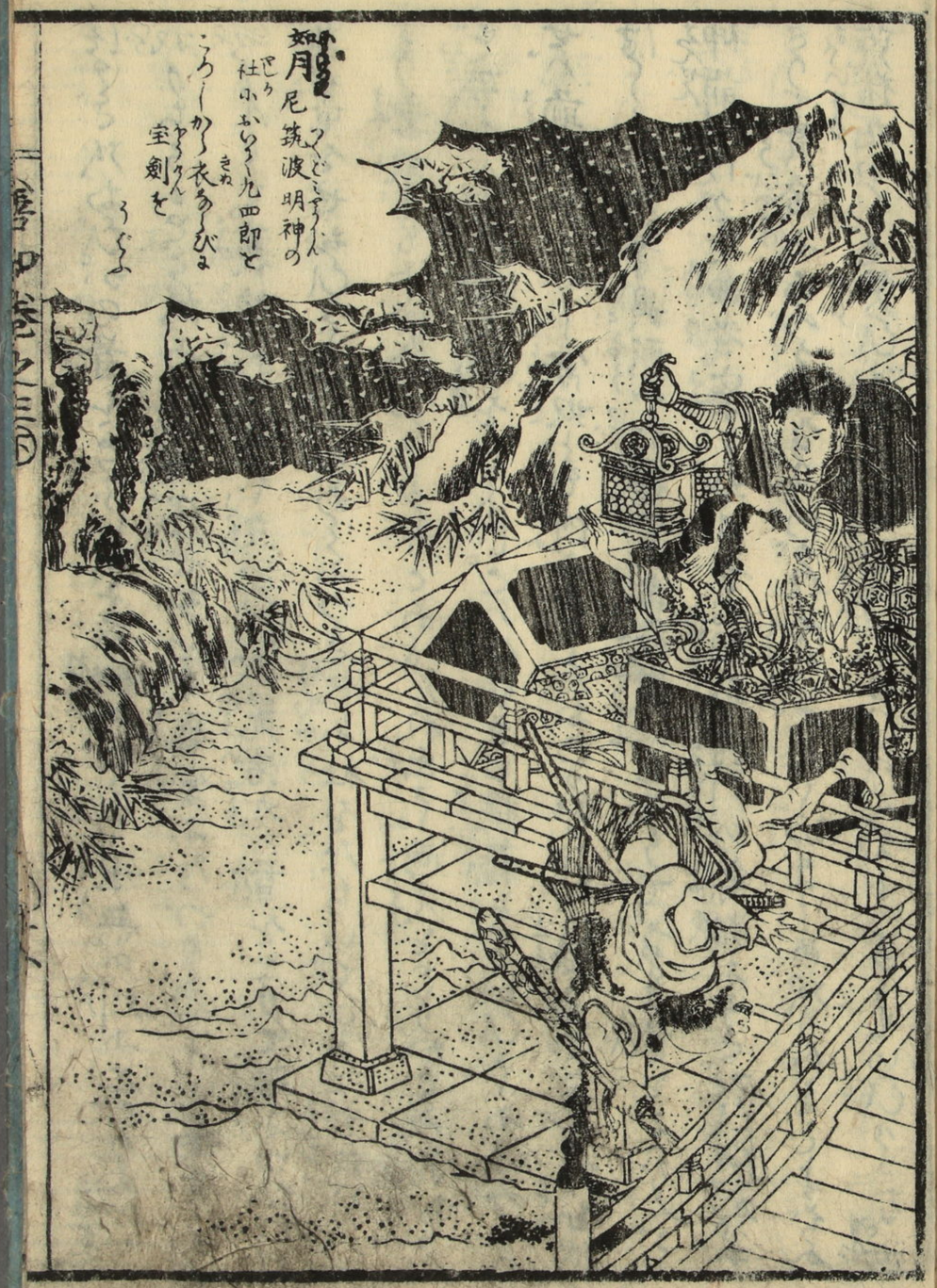
詞をかハとも穢しけるとど。ゆしこと紙得どもくふるぐし。妻が父もかりそめ
ふも。汝が爲ハ師ふあくぐや。夜中師の家ふもぐびいるのこるふぶ。夫あ
女を奪くく。心ふもぐこるのどいゝ。洲義とやいえん非道とやいえん。人の使ひ
かりたる畜生とハ汝が事なり。たとえ一命を失ふとも。操をゆぐるぐ女と
ぐふうや。妾が身とかく薄命ふくく。度くふ難儀ふあふ。皆是宿世の
悪報なるべ。かく捕へられくふ。とても生くハがどとはじこくハいづくもぐ
ふども。深山とおぐしければ。女の身ふく逃もくべき便もなし。なんぢがごとき
畜生の及ふかれハくらぐけるとも。操をゆぐる心なれば。無益の
詞を費さどとも。とく殺せ。うの報ハあるうなれ。ゆゑてゆひもくべと。
且怒且悲と身をもだくぐのしてけれ。九四郎ハかくふくさげふもぐうめ
られく。心中大ふ怒るといくども。いふもしこゝゆひをさげどやとおりふ心十分

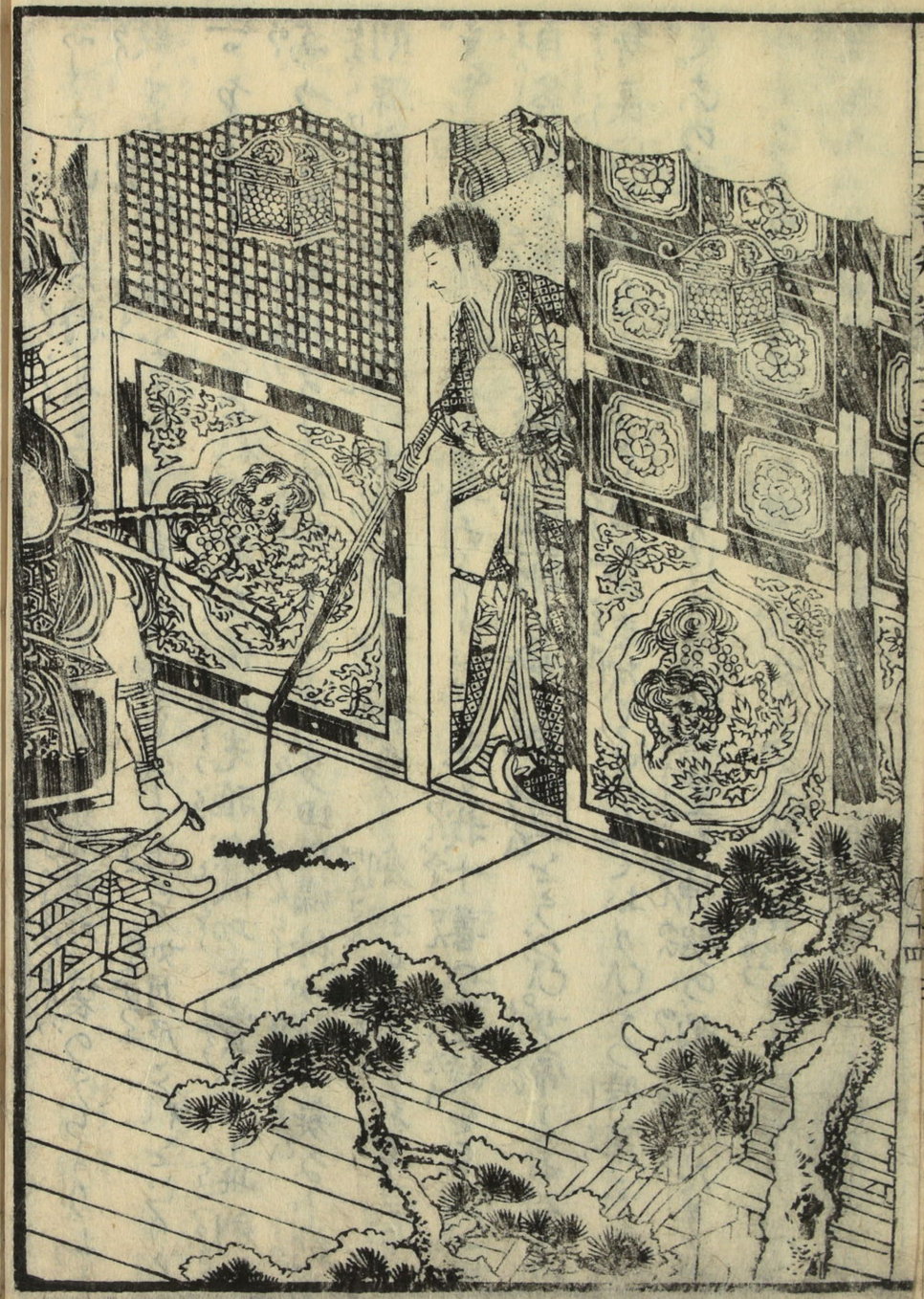
るれば。自慣をゝのびく詞とゆつてげ。汝さぞじく貞烈を生りう。たとひ鉄石の心なりとも。かくはぐ我心底の誠を告くふ。みどゝ一點の情をおりはざれ。負も不負も命ありての変なるふ。我一刀の下ゝ黄泉の客となるべゝ。ゆのゝもあるべゝ。龍の淵虎の穴ゝおちたる汝。どこまものぐ乙いなし。我おりひ込るゝ毒蛇の乙入ゝ日然なりと。おゝつゝかりつゝかくゝふかたくゝくといへども。唐衣を耳ゝおも乎入ゝど。あやのしてもぐじしめく。露ぐうりもらけぐべ紀様子なゝ縁ば。九四郎ハ益怒て。さハいうふ以ぐもうけひうどや。然るうえハせんとなば。あくゝふ花と太刀風よりゝとハいくゝもけまど。是非ゝおよびねそん情せよといひつゝ。緑の黒髪を手ゝかゝふみくちうゝふひつ提。氷なと剣を拔く胸のうくゝふひやくゝと押あく。いどくゝかくゝくも乎入どやと。未練の詞ゝ唐衣ハ。なほ頭を打ふれば。九四郎ハとれまぐくとおりひとり。胸ぐらとりゝ

攫手ゝおゝあて。刀をとりなおして。吭ゝおさしとゝおさんと思まれ所ゝおりひとけざらくゝろの方れ。唐戸のひきより。明晃くたれ刀の尖。いな妻のごとく閃きいで。九四郎が背中より。腰ぐさとけきとゝ。一ゑぐりゑぐりとまれば。呀とたまきるゝふ声とともゝふのひきゝゝふひるがりて。縁より下ゝおちたりう。げゝふもとくちよれ形勢なり。此折しも雪なれの音。いとゝとゝほどくひたゝりう。社も震動し。峯もゝぐれおつるかとゝぶぐこりあるゝふ。唐戸をゝろとひくゝたく。顔さゝいどじ。かくゝと乎えゝりくゝふとく笑ひ。血刀を提くく。ゝづやゝふ歩こゝ生くゝれば。別人ゝふあくゝど。是乃如月尼なり。あくゝふづたて荒猪九立出。尼公の前ゝふひざまづけば如月尼ハりのいくゝど。目ゝ式りつくく下知をゝると。荒猪九その意をとゝ汲とくゝ陷をくゝり。九四郎が首ゝ式打おくゝてにゝいくゝ也ば。如月尼かくゝ荒猪九ゝかくゝせくゝれ。将門の霊を慰

とそれ。一紙の祭文をとりいだしこ。かの首の口中ふふくはめ。枕の墨さをゑ
神前ふそなへこ。ちぐ〳〵祈念をとり。夢ふ夢うゝしどゝく。忙然とゝく
あるゝ居られ。唐衣をくしのごゝく菖蒲のうちふいれゝ。さていはけゝ。
百日無言の修行今疾く願ありこ。かゝれ大雪ふく供物ふさぐき首が得
と。修行をとげゝられを。涙く愁たるふ。かの者こゝゝとふありく首が
ふるる。夏。大願成就のきるしあるといひつ。かの錦の袋ふ入ゝれ宝剣と
えつゝ。とりあげく袋を去て。抜とうらて。かゝとうふきえ残ゝるゝ。銅灯
篭の火をかゝげ。うらうゝくこゝじえく。扨も高き剣かな。紋ハ星れ
つゝふあれごとく。光ハ波のあるふ似ゝり。水ふハ蛟竜を断。陸ふハ
犀革を斬ぎし。傳聞南越の巨闕。西楚の太阿といふ名剣。我朝
十柄のけるだあも。とさゝおとれべゝふだと賞歎し。かゝる良剣をいゝ

ふゝくもつゝ持ゝるやといぶりけるゞ。荒猪丸。袋のうちよりおと
敬くる。一紙の狀とえつゝ。ひろひとりゝにし出と。如月尼これをとりく
一ゝ読くどし。こゝとれ。大宅左衛門光雅ゞ武功を賞ゞく此剣を
ふるるといふ感狀あり。花押をうゝふ。多田の満仲ゞ狀ふ疑ゝ。剣ハ
則源家の秘藏。陰の太刀といふ名剣あり。剣相の秀ゝ我もうゝ
ぞや。今あゝためいふも夏あゝしけるゞ。我十善の皇統をゝ絶ふ掛
自斧鉞を執ゝ。万國を征罰し。當今の位をうゞひ。女帝とあをゞ
身良門を関白とゝ。亡父の志ゝくさんとおゝひゝろ時節ふゝ
ぞ。ゝの陰れ太刀の手ゝいりしゝ我願望を神明の納受したまふ
ゝゝゝふめ。殊更源氏の魂をゝゞゝ。うゝゝ吉兆ゝゝゝとゝゝ
荒猪丸いふもさゝそれゝゝそ。かゞりゝく去びね。かゝゝ如月尼かの


如月
尼筑波明神の
社ふおろく九四郎と
ろ〜かく衣多〜びま
宝剣を
くぐふ



ほそぐ〻ゆあびかの首をとらしめ。それ例のごとく水無の川ふちづのよ。此世我りちうるとこゝろあれば。此侭せもひく庵室ふたづさゝぐ。くやまうり飯くんとて。蓑笠打着て立いづれば。荒猪丸い首をとりて腰ふゆひは。葛籠をせもひて尼公のあとふつきゝ已ふ社をたちいでけるに。古枚のうげより宮奴ども十四五人ぞろ〳〵とあらはれ出て。両人をとりかこみ。飛かゝるぜ勢なり。荒猪丸眼をいからし。こゝ伊の西の原籍ぞといひてあらみまわせば。前ふとくみ〳〵宮奴ども。何由ぞとふおろなれや條うゑ。このごろ公ゆほ〳〵に。汝等異形ふ打扮て。毎夜當社ふまうでゝ。なほ首をそなへて。神前をけがすと曲者。察しおりのふ。朝敵将門の餘類ふてがひは。かくありて賞金ふあづかるなり。のがれぬ所ぞとゝいまゝめ。ゆらけよとよばゝ。荒猪丸わらひて笑ひ。のいふ口を持しらいはるがふ。よくもいひたるな。汝等ぐ〻ふ出しへ。運命の尽たる所ぞとし。いらゝ〳〵首をひき抜て。此世のいとゝをとゝべとて。葛籠をとりて木蔭よりおろし。大手をひろげ仁王立ふなりぬ。いでゝ〳〵こゝれとよびてまわれば。数猛ぞうえたりわれ。宮奴どもこれをうけて。詞たゝかひ無益なり。ひくあらうて手柄ふせよかしとて。前後左右ふ組つゝ。名いやゝ〳〵と声とりけく。組ふせんとぞあせりけれ。荒猪丸ハこれを物の数とも せぞ。拳をあげて打倒し。足を飛せてぬみたるゆ。入ゝり〳〵。我組とめんと取つゝを。手ふあゝゝみまわせく。ひたゝ〳〵。あげたりけるとべ。或ハいゝ〳〵ふ打つけられて。氷柱ふ目をほゝわもあり。或ハさうほふうげられて。雪ふ面形つくるもあり。ちぐ〻のうらふせハ人。氣絶して起あがゝ泳ぱ。残る者ども口ぐ〻ふ。とても生捕ハうるふほゝ。首取て高名ふせるとして。社のうちふ納あり。鉾を手ふぐ〻うり。四方

より穂先をそろへぬつとさけたゝかつてさがりつゝ。荒猪丸少しもひるまずと刀を抜き水車のめぐるごとくふりまはしけるに。其音颯〻として風の梢をあらしとぐごとく。劍の光ハ晃〻として。雪ふ映じとれ皎月のおぼろなり。白張着〻れ宮奴ども。乱立〻れ形勢ハ鷺の群飛ごとくにして。近江警を見かゝしといふ。雪の句を思ひ合せるごとくあり。荒猪丸飛るの如くとゝふ。雪を踏立火花をちらして戦。或ハ石袈裟。左袈裟。あゝひと。梨割。車斬。片脇。ふ〻れ〻伏もあり。足ひ〻ぬ〻倒ふ〻もあり。暫時のうちふ一人も残らず打とけるに。屍ハつみ〻岡のごとく。血ハ流れて〻泉のごとく。白雪〻ふちまちくれなゐふ変じて。氷の地獄ふ血の池を。俄ふ堀如くなり如月尼ハさるてふどより。社のうしふ刃を避く。あゝい丸がくたびれの。始終をえ居うちなるが。此時階をくだりていふく。汝が武藝抜群なり。さるに父君の羽翼〻れ。隅田九郎将真が嫡子なり。戦場のそゝふ。ものゝふれくたのもゝ。我輩の素姓を察〻たる奴原なれば。一人も生ておくまじ。後日のうきめをうけなり。常言ふも。人を殺さば血をえよ〻そしふなる。よ〻りとゞめをさせよといふまど。あゝ猪丸げふもさりとあるとゝ。のゝり伏〻れ十四五人の者ども。引おとし〻。いち〻首をぞうちける。如月尼ふ〻びいひけるハ。おのれ〻の人を殺〻れど當國の住居ハかなるべゝ。我かゝ〻別ふ〻れかゝれ家なり〻あるとゝ。夜の明ざれうちふ。菴中の雜具をとりまとめ〻。かゝとふおち行ぞし。その女ハ當國の浪人。大宅太郎光國が妻ふうさがひは。我いまゞ光國と〻えちゝとゞといくども。曽〻文武の達人なること〻ハ及びね。その女ハ人質とゝ〻。味方あるねゝば。一方のたもゝけなれべ。ながゝ葛籠れ

あくに九雲中
宮奴となりて
勇猛ふるふ

うちにありて。さぞ恐懼なましん。いそぎ庵中にたづさへて。介抱し。相ともにひそかにおち行べし。幸雪もふりやみぬ。いざやとてすゝんで荒猪丸を見て。麓をさしていそぎけるに。夫はさておき爰に又。大宅太郎光圀も。かの夜佛事をはてて四更の比家にかへりけるに門口に下女斬られて伏居たれば。大に驚き。うちに入て妻が衣をたづぬるにうへぞいそがはしく下女を引おこしてたづぬれば。いまだ少の息ありければ介抱しく様子をたづぬ。苦しき息の下より。九四郎が衣をうばひ宝剣を盗て。逃去しとかたりて。その侭息絶て死したりけり。光國益おどろき。あわてふためきて里人をやとひ。四方に手分してそのあとを追しめ。おのれも東西を奔走してたづねけるが。つひにかげだにみえず。かくされ克三日三夜におよびけれども。いよ〳〵ゆくへしれざれば大に愁て。

水鳥の陸にまどへるごとし。寝食さへ安からず。さて熟おもふに。いかなる亡父は忌明にならざるに。又かゝる災にあふこと。何たる報ぞ。亡父の遺言といひ。家の面目ともなるべき宝刀をうばゝれ。あまつさへ義理ある妻をうばゝれて。何安閑とくらしてあるべきや。たとへ彼賊天に路あり。地に門ありて入とも。我一念の凝所をすつべし。たづねいださでおくべきかといひつゝ。拳をにぎり牙をかみしめて憤けるが。此里の村長へ。かねて学文の弟子になりたる者ありければ。所持の田地家財を權かれにあづけおき。俄に旅よそほひして。のくおりしも武者修行といひなし。心底は源家にたいし一功をたてゝ。父の勘氣をつぐのひ。且九四郎がゆくへをたづねて。宝剣をうばひ妻をとりかへさばやと思ひつゝ。日もえらぶにおよばずと。片時もはやくと心せきて。ほどなく発足

せんとて。先亡父の墓ふみうでいまゝ。たゞらふ水無の川の下流
渡りけゝふ。川上より一ッのうまゝしゝ首流れてく岸ふつきゝ枝を
偶えつけゝいぶり。ゆゞそりあゞくゝ。ふ。是九四郎が首ふみぐれ。
よゝくゝえれば伯ふあゝん。口中ふゝみゝ枝のあれば。小柄をこゝつくゝに
をひゝ。うちあるものをひきいゞしゝえゝふ。一通の書あり。濡とりて
爛ゝれを。公おゞゝあつゝひゝ。ひゝ見るよ。人の霊を祭る文なり。
讀おりゝくおりひけゝへ。此文中ふ新皇帝の霊を祭るといふ五字あ
とえれば。正是將門を祭る文ゝん。さて此者將門が所縁の者ふ殺
ゝ。さとえれば妻も剣も。將門が餘類の手ふおちたゝふ疑なゝ。
此一通ハ後日の證據となるべきものゝとて懐ふおさめ。かの首ふ
むりひゝくいひけれへ。汝が悪業ゝふちまち報来りゝ。此さまふ

ゝりぬ。我恨の拳おりひきるゞゝとゝ。手どゝの石をとり。頭ふ微塵
ふ打碎ゝ。水中ふ踢おゝ。あるこゝちよたかな。かの將門の餘類ども。
よゝも當國ふゝゝゝゝ。先近國をたづねゞゝとおりひて。さぐり
旅路ふおりひさけゝ。

○おりふふ如月尼。九四郎が首をとり。口中ふ祭文をふくませ。髻ふ
おりの石とゝつけゝ。水毎の川ふゝづめたるゞ。おりの石おゝゝ。
川下ふ流つきゝれあゝめ。人もあゝゞさふ。光國が目ふとまりけゝ。
天光國が孝義を感じゝひゝく。妻あゝびふ剣をたづねゝ便を得
ゝせ。且如月尼の悪意をあゝみゝ。滅亡の一端とゝゝふあゝめ。唯
是おゝゝゞゝハ天の冥罰なり。光國妻ふ再會の度如月尼滅亡
の子細をゝゝんと要せゞ。第十八回。第十九回を讀得てゝゞし。

○唐衣。九四郎が爲ふ。ゐぐ〳〵一命を失いんと志つれども。つひふ操弦破らざど。死をるとも身を潔せんとぞ。げふ人の妻〳〵者へ。ゆ〳〵あり たるとぞか〳〵。

○九四郎非道を行ふ。その報目前ふいるりて。如月尼の爲ふ害せ〳〵。如月尼も又のらふ光國が爲よその身を亡と。蟷螂蟬を捕ふ。黄鵲後ふ在こ〳〵と知ど。世人此理を顧ざんべあ〳〵ぐ〳〵ど。

善知傳巻之三下冊終